

ミチツネのミヤジヤシムル小品集

鍋  
鍋

み  
や  
な  
べ

M  
T  
e  
t  
s  
u  
o

エッセー  
掌編小説  
詩  
ほか

※本作品は、縦書き表示を実現するため画像ファイルで構成されており、文字サイズが変更できません。  
ご了承くださいませ。

## カメの接客業

昨年の秋に仕事で動物園にお邪魔した。小さな動物園で、希少な動物がわんさか、というところではない。飼育されているのは主に、ヤギ、シカ、猿、あとブタとかウサギといったメジャーな動物だ。そのこの売りは、動物たちとふれ合えることだった。

取材でおうかがいしたこともあって、園長さんに付き切りで動物たちの説明をしていただけだ。そのお話から始めて知ったのが、園に住む動物たちは野生動物よりも寿命が短いということだ。三食昼寝付の生活を送る動物たちが、厳しい生存競争のまっただ中に生きる動物よりも早死にってしまうという事実は意外だった。ストレスや、お客さんに変なものを食べさせられてしまうことが原因だそうだ。お客はいつとき動物のかわいさを満喫すればそれでお終いだ、が、職員の方々はそうではない。動物一匹一匹の個性をあれこれ話してくださるのを聞き、動物を大事に思う気持ちと、命を扱う仕事の大変さがうかがわれた。

さて、ここでは体重三十キロはある大型のリクガメも飼われていた。園長さんによる紹介を聞いているあいだ、このカメは、重ねた枕木でできた低い囲いのなかをうろうろ歩き回りながらエサのキャベツをモシヤモシヤ食<sup>は</sup>んでいて、わたしたちがその場を離れると小屋に戻っていった。そもそもアフリカに生息する種類なので寒さに弱い。だから小屋のなかには電気ヒーターが入っている。さすがに冬ともなるとぜんぜん出てこないそうだ。

園内を一巡して帰りがけにまたこのカメの囲いの近くを通りかかったので、なんとはなしに眺めていた。カメはまた小屋に入ろうとしているところだった。囲いの前には家族連れが足を止めていたが、雰囲気からすると、しばらくそこでカメを見ていてそろそろその場を立ち去るところらしかった。

後日、カメの種類を控え忘れていたためにインターネットでこの動物園を検索した。幸いこの園への旅行記を載せているブログが見つかり「ケヅメリクガメ」だと分かった。カメの写真が載っていて、「このカメかわいんですよ、しっかりカメラ目線もしてくれました！」とも書かれていた。

もしかしたら園の動物たちは、（少なくともこのカメは）神経をすり減らしながらお客へのサービスをしているのかも知れないと思った。ストレスで寿命が縮むのも、彼らが園の職員の方々に恩義を感じて律儀にがんばり過ぎているためかも知れない、と。根拠はないけれども、ミドリガメならともかく、ケヅメリクガメに接客業は向かない気がする。お客なんか放っておいて、むしろ長生きして欲しいと思ったのだった。

幻肢痛げんしつう

Kが骨肉腫こつにくしゆという骨のガンのために右腕を失ったのは十三年前、高校生のころだ。利き腕を失い、いろいろな面でかなり苦勞しただろうに、ゆかいなところは変わらなかつた。

大学卒業後、就職して立派に働いている。ある程度貯金もしているそうで「次は嫁さんを捕まえない」という。たいしたものだと思う。

ただ、いまでも失った右腕に痛みを感じるのだそうだ。「幻肢痛」というらしい。腕つかきどを「司つかきど」っていた脳の神経がなにかに反応すると、実際にはもうない腕にかなりの痛みを感じるのだそうだ。そのせいもあって義手も着けていない。Kの場合、気圧が低くなっても痛むそうで、「氣象衛星ひまわりに負けない精度だ」と言い張る。

その日、仕事を終えたKは、雨降りだったために激しく続く例の痛みに耐えながら電車を待っていた。いつもに増して痛む日だったという。郊外の小さな駅で普段どおりホームに人はまばらだった。そこに一人、背が低くやせこけた、どうも雰圍

## 幻肢痛

気の変な男がいた。K曰く「骨の髄まで精気を吸い取られた顔」だった。

駅の構内放送が特急の通過を知らせたとき、その男の顔は真っ白から真っ青になって、最後には奇妙に緑がかったとKは言った。

「医者から骨肉腫の説明を受けたときの自分もあんな顔色してただろうなと思ったよ」

まさかとは思ったが、Kは念のためそれとなく男の近くに立っていることにした。でも結局男は表情をやわらげてベンチに腰掛けた。それを見てKがホツとしたときに特急が入ってきた。男はとたんに駆け出して線路に飛び込もうとした。不意を突かれたKは反射的に手を伸ばして男の服を掴んだ。

Kは高校生の頃水球部員で、骨肉腫の痛みも筋肉痛かなにかだと思って我慢していたから発見が遅れたのだそうだ。水泳は続けており、長身でたくましい男で力は強い。おかげで間一髪、男はホームに倒れ込んだ。そしてすっかり腰が抜けているところを、Kが話をつけた駅員に抱えられていったそうだ。

このときおかしなことにKは右手で男を掴んだのだという。「不意の出来事だったから、利き腕が自然と出たんだよ」と。あいにくその場面を見ていた人はおらず、

もちろん捕まれた男には見えない。K自身も、無我夢中だったのではっきりとはわからないという。

「でも右手で掴んだ感触が確かにあつたし、それに第一、その日は雨だったから左手には傘を持ってたんだ」

幻肢痛は相変わらずだそうだが、その一件以来、前ほどこれを煩わづらわしく思わなくなつたようだ。

「幻肢痛がなくなつたら、いぎつてときに手が出ないだろ。次は嫁さん捕まえない」とKは言う。

一杯やりながら聞いた話だし、かなりうさんくさいけれど、ともかくKはこんな具合にゆかいで気のいい奴なのだ。



## カワセミ

近所の公園の小川で、岩にとまるカワセミをしばらく眺めていた。深いエメラルドグリーンに輝くゴージャスな羽と、愛嬌ある大きな頭とくちばしを持つ姿に惹かれてのことだった。

ずいぶん綺麗だったので、自宅に戻ってからカワセミについて調べてみた。

カワセミやその仲間は世界に広く分布していて、かなり昔から人々を魅了していた。漢字では宝石の翡翠ひすいの字が当てられているし、古代中国の国家・漢の皇帝の武帝は、宮廷の一部の壁にカワセミの羽を貼り付けて飾ったそうだ。またギリシャ神話にもカワセミにまつわるこんな話が残っている。

かつてケユクスとハルキュオネという夫婦がいた。夫のケユクスはトラキーアの王様。妻のハルキュオネはアイオロスという風の神様の娘だった。仲むつまじい夫婦だったので、夫のケユクスが海難事故でなくなったとき、ハルキュオネはカワセミになって夫の元へ飛んでいき、夫もまた神のご配慮で同じ鳥となり、仲むつまじく暮らしたというものだ。

これは一般に広まっているものだが、オウイデイウスという詩人によって改作され、恋愛話や美談がふんだんに組み込まれたバージョンのギリシア神話だ。ものすごくはやっただので、現在でもよく知られることになったのだが、もっと古くから伝わるオリジナルの顛末は違っている。

この夫婦は、素性のよさを鼻に掛け、神の名を借りて自分たちを名乗った。夫は妻をヘーラーと、妻は夫をゼウスと呼んだのだ。思い上がっていた二人は天罰を食らって滅ぼされた。のちにゼウスは彼らを鳥にし、ハルキュオネをカワセミに、ケユクスをカツオドリに変えた。

物事を美化したがったり、美化されたものを好むのは人の一般的な特性なのかもしれない。けれども、わたしが見ていたカワセミは不意に大きな粗相をすると、直後に華麗な羽を広げて、何食わぬ顔で飛び去ってしまったので、どちらかといえば古い話の方がイメージに合うなあと思わされたのだった。

## 変身

出張から帰ってきたらスーツに長い茶髪がくっついていて、ポケットからは女性の安っぽい名刺が出てくる、なんていうのは昼のメロドラマの中だけの話だと思っていた。こんなことが現実には、しかもわたしの夫に起こるなんて……。

もしやと思って夜中にこっそり彼の携帯電話を確認したら、源氏名らしき名字のない女性の名前が何件も登録されていた。これはもう間違いない。まじめ一辺倒で、わたしと付き合うまで女性を知らなかったというから「このひとなら絶対大丈夫」と思って結婚したのに。

明くる日の夜、寝室でシクシク泣きながら小一時間問い詰めると、夫はあっさり謝罪した。

「隠していて悪かった」

夫はそう言って深々と頭を下げた。それから背後のクローゼットの扉を開き、服をかき分けて奥から見たことのない旅行カバンを取り出し、鍵を外して蓋を開けた。

## 変身

なかには女性ものの服や長い茶髪のカツラがきちんと収まっていた。

「……………これは……………俺の服なんだ」

夫は自分が女装をするに至った経緯を、理路整然とおごそかに語ってくれた。こんなときにも几帳面なひとなのだ。

生真面目な自分の性分を自分でもひどく息苦しく感じていたときに、たまたま人に誘われたのが始めたきっかけだったそうだ。やってみると、とても解放された気分になったので、それ以来二カ月に一度、同じ趣味を持った仲間の集まりに出るようになった。女性の名刺もそのときに夫が使うとのこと。女装したときの名前は「アケミ」ちゃん、携帯電話に登録されている源氏名はその仲間のものということだった。

話を終えてうなだれている夫にわたしは言った。「なににもやましく思う必要はなかったのに」と。「そのくらいのことじゃ嫌いになったりしないわよ。わたしたち夫婦でしょう、もっとわたしを信頼してよ。なんでも正直に話しましょうよ」

わたしの言葉に夫は嗚咽を漏らして感動してくれた。単純で、素晴らしくいい人だわとわたしは思った。深く安堵する一方で良心がすこし痛んだ。

わたしはかつて男性だった。

十七歳で性同一性障害と診断され、ホルモン療法を開始し、三年後に性転換手術を行い、裁判所への申し立てを経て晴れて心も体も社会的にも女性となった。夫と出会ったのはその後のこと。ただこのことは、良心が痛もうともこの人に知られるわけにはいかない。

夫婦だからといってなんでも正直に話せるわけがない。

## 紅葉

楓の紅葉こうようを美しいと感じるようになったのは二十六歳頃からだったろうか。それまでは紅葉というものを意識した覚えがない。それが今ではずいぶん変わった。

孤立した一本の楓が川沿いの溪谷や堤の縁に根を張り、日の光を求めて開けた川面の上の中空へとほぼ水平に幹を伸ばし枝を広げ、風に吹かれてゆったりとうなだれてしなる枝と見事に色づいた葉がそよぐ様を見たり、音を聞いたりしていると、しばらくのあいだ飽きることもない。

そういえば以前、日本が好きで日本に住むようになった西欧の方のこんな内容のエッセーを読んだ覚えがある。

桜の散る光景を美しく感じるようになったのは定住してから二十年も経ってからだった。それが分かるようになったことでようやく自分の心が日本人になれたように思えて大変嬉しかった。けれど自分以外の外国人にとっても、はかなく散る桜の花に美を感じる心情を自分のものとするには少なくとも二十年はかかるだろ

うと思う。

モミジの美しさを愛でるのも日本的な美意識によるものではないだろうか。わたしは生まれついで日本人だけれど、すでに述べたようにそういう感覚にはそもそも疎かった。

六歳で物心が付いたとして、以来わたしも二十年かかっていわゆる「日本的な美」の一端を理解するようになったのではないかと思う。こうした美意識は、街中の公園などに桜や楓の木が植えられてきちんと管理され、それぞれ季節になると事にその自然美を見せてくれることで、人々の情操を育むよう配慮されている環境のお陰であって、決してなにもないところに生まれたものではないと思う。

自分も生まれつき日本人ではなくて、日本の文化の中で生きることと徐々に歴史と伝統が血肉となり日本人になるのだなど、そんな当たり前のことを考えたのだった。

## 犬の進化

休日の朝、わたしは普段よりも遅く目覚め、いったん部屋のカーテンを開けてからまた布団にもぐった。人生のささやかな幸せ、二度寝。

冬のやわらかな陽射しが寝床まで差しこんで、長く伸びた庭木の影を畳に映していた。それは気ままな北風に揺られる木々を忠実に真似て、海の中をただようワカメのようにわたしの目の前をさまよっていた。わたしはしばらくぼんやりとその様子を眺めてから起きだした。

台所に立ってワカメと豆腐の味噌汁を作りつつ、なつとうや佃煮つくだにを冷蔵庫から出していると、我が家のイヌが現れた。座敷イヌなのである。彼女は、前足を突っ張ってお尻を突き上げた威嚇いかくするネコのようなポーズで伸びをしてから、とても退屈そうに大きなあくびをした。

わたしが「おはよう」と声を掛けると「おわんきゅおん」と奇妙な鳴き声を発した。生まれたときから人と暮らしているので自然と人に倣ならうようになったのだ。と



## 犬の進化

はいえもちろんイヌは人間ほど流暢りゆうちようにしゃべれない。

そもそも人間は他の動物に比べるとかなり器用に声を使う。ある科学者によると、それは直立歩行をするようになった結果なのだという。おかげで喉の空間が広がり、声帯も長くなって、巧みにしゃべれるようになったのだそうだ。

イヌはわたしのところへ来て、ぴよんと跳ねて立ち上がり、わたしの膝小僧のあたりに前足でがちりしがみついで、勢いよくしっぽを振った。食べ物の催促だ。取ってあった煮干しの頭とはらわたをあげたが、およそ二・三秒でイヌはそれを食べ終え、またしがみついできた。

わたしはできあがった味噌汁をお椀に注いで、うまそうに飲んで見せた。イヌは目を輝かせてお椀を見つめた。わたしがお椀を上下左右に動かすと、イヌも頭を上下左右に振った。

わたしはお椀を置くと、イヌの両前足を手にとってイヌ用の低いテーブルまで後ろ足だけで歩かせた。両方の前足をテーブルに載せ、脚が低く背もたれが高いイヌ用のイスに座らせた。そしてイヌ用の器に味噌汁をついでテーブルに出した。それにして、いまはどんなイヌ用品でも売られているものだ。

ショートショート

イヌはお椀に鼻を近づけてから、欲しがらんじやなかったと言いたげな表情でわたしの顔を見た。わたしは再び自分の味噌汁をうまそうに飲んで見せた。

イヌはしぶしぶといった様子で味噌汁をひと舐めすると、「ユルシテッ！」と叫び、後足でイスから立ち上がりそのまま駆けて逃げた。

## すごいしやもじ

最近、高級車の広告文を書く機会がありました。クルマの広告にはかなりクセのある文体を求められるのですが、これは普通、他に使い道がありません。とはいえせっかく練習したのだからあれこれ使ってみたくなるのが人情というもの。そこで、高級車を紹介するつもりで、日本を含むアジア各国の米食文化を陰で支え続けてきた道具・しやもじにスポットライトを当てて広告文を書いてみました。

およそ四千年前に始まったとされる稲作文化と一緒に生まれたであろう「しやもじ」ですが、エッセーやなにかの主役になるのは初めてなのではないでしょうか？ さて、ここで高級車の広告文作成のポイントを挙げておきます。一つ目は、ちょっとでも野暮やぼったさを感じる言葉は横文字にすること。次に、「あらゆる」や「卓越」といった、あいまいで押し強い装飾語句を多用すること。くわえて、機能にはなんであれ長い英語名を付け、その頭文字の省略形を当然のように使い「あんたがこの言葉の意味を知る必要なんかないけれどとにかくこれはすげえんだぜ、ただそう思ったりやあいなんだよ。わかったかい」と聞く人に暗黙の圧力を掛けること。

つまるところ高級車の広告文の主な目的はステータスづくりなのでしよう。「これを持つ人はすごくて、持ったら自分もすごい人になるのかも」と思わせることが肝心かんじん要かなめなのです。それでは、本題の広告文です。

夜空に浮かぶ三日月の弧を彷彿ほうふつとさせる洗練されたボディラインと、人間工学の探究から造形されたハンドルは、あらゆる人の手に完全にフィットし、卓越した一体感と操作性を生み出す。それは握りしめる度に、これから始まる出来事への特別な予感を抱かせてくれる。

ボイルド・ライス<sup>1</sup>が待ち受けるライス・ケトル<sup>2</sup>に差し入れ、必要な量を自由自在のハンドリングで追い求めることは、スポーツテイーな体験ですらある。数十から時に千を超えるグレイン・オブ・ライス<sup>3</sup>をホロー・プレイス<sup>4</sup>が的確にキャッチ。

\*1 ボイルド・ライス(boiled rice) ① 飯

\*2 ライス・ケトル(rice kettle) 炊飯釜

\*3 グレイン・オブ・ライス(grain of rice) 米粒

\*4 ホロー・プレイス(hollow place) ④ ぼみ

ライス・ボウル<sup>1</sup>に移し替えるときも、ホロー・プレイス全体をまんべんなく埋め尽くす緻密で規則的なSSP<sup>2</sup>と新開発のGSC-FRT<sup>3</sup>は、ニュー・ライスの<sup>4</sup>強いねばりすらいつさい寄せ付けず、最後の一粒にまでおよぶ完全な移動を実現する。

環境に配慮して動力にはHPS<sup>5</sup>を採用し、CO<sub>2</sub>排出量ゼロを達成。

妥協を排して性能を追い求めるクラフトマン・シップが、数千年の伝統に新時代の息吹を込めて創りあげた――

## 「SUGOI SHAMOJI」

\*1 ライス・ボウル(rice bowl) 茶碗

\*2 SSP = Surface Small Projection 表面小突起

\*3 GSC-FRT = Geochelone Sulcata's Carapace like Fluorine Resin Treatment ケズメリクガメの甲羅のようなフッ素樹脂加工

\*4 ニュー・ライス(new rice) 新米

\*5 HPS = Human Power System 人力

狐媚こび

ずいぶんとへんぴな場所でのインタビュー取材を終えた私は、今日のがんばりをねぎらってファミレス行きを決めた。来るときには気付かなかったその店は、暮れく方の畑中がたで誘蛾灯ゆうがとうのように光を放っていたため、だいぶ遠くからでも目に付いた。私は車を駐め、店に入り注文をした。運ばれてきた食事にひとり舌鼓を打っていると、私よりあとに来たらしい、通路を挟んではす向かいの席に座る女性の独り言が耳に入った。

作家志望である私は、世の中を知るためいつ何時でも気の弱い野ウサギのように周囲の状況や会話に注意を払っている。充血するほど目を開き、耳をそばだて、その耳をときおり器用にびくびく動かしているのだ。普段は自炊ぼんさんで食費を抑えて書籍購入費に回すため、滅多に来ることのないファミレスでの晚餐ばんさんでもそれは例外ではない。

だがその若い女性が繰り返す呟きは別格であった。店内の喧噪けんそうと混じることなく、注意を払わずともまるで鉱石ラジオを通して聞く狂信的な政治演説のように私の意

識にジクジクと染み入ってくるのだった。

「……カピバラ……アレクサンドロス三世……カピバラ……アレクサンドロス三世……」

それはまさに私が愛して止まない世界最大の齧齒類げっしるいで一メートルもある巨大なネズミのカピバラと、もしカピバラを飼うことができたなら付けようとかねてから夢想していた名前であった。こんな単語の組み合わせがたまたま偶然に私の前で口にされているとは思えない。

そこで改めて女性に目を遣やると、私はその姿にも心を奪われてしまった。

彼女は細身の鼻環のような大輪のイヤリングを付け、大きくうるんだ牝牛のような瞳をしていた。着ていたのは、あたかも土星の大气のしましまを傾けて写した色柄の、体にぴたぴたのショート・ドレスだった。服が包んでいる体も装いにふさわしく迫力あるもので、まるでホルスタインだった。

私は不覚にもつくづく見入っていると、彼女に気取られてしまった。すると彼女も私を、無言でじいじい見つめた。私は恥ずかしくなってそれからしばらく食事に目を向けたものの、意識の方はそのまますっかり彼女に注がれていたのだった。

やがて彼女はドレスの裾と太ももの境に置いていたハンドバックを手にして立ち上がり、カツカツとヒールの音を立ててレジカウンターに向かい、会計を済ませて店を出た。

気の弱い野ウサギのような心の持ち主である私は、こんなときすぐさま行動を起こすことができない。なのでただ彼女が店を出るさまを遠目に追った。彼女が店を出ても、ファミレスの客席側の壁一面はガラス張りだったので、店外に漏れる電照に薄ぼんやりと照らされてその姿は見えていた。

彼女は意外にも、駐車場に駐まっていた幌付トラックの荷台に乗り込んだ。

彼女が視界から消えると私はようやく勇気を奮い起こし、追いかけて声をかけるべきだと考えた。まだ晚餐は平らげていなかったが諦めた。もしかしてあの幌の中では、アレキサンドロス三世という名のカピバラとホルスタインのような若い女性が、私を待っているのかも知れない。作家になれずともそれだけあれば人生バラ色だ。

このときトラックのライトが点いた。誰か運転手がいたのだらう。発進する前に追いつかなくてはならない。私が立ち上がって夢中で扉に向かうと背後から声がか



狐媚

かった。

「お客さま！ お支払いをお願いします！」

はっと我に返って振り返ったが、そこには誰もおらず、ファミレスの店内でもなかった。ぐるりを見回すとそこは一面背の高い草原だった。そのとき朧夜おぼろよのなかキツネらしき動物が、ふさふさしたしっぽを揺すりながら軽い身のこなしで駆け去るのが見えた気がした。遠のいてゆくぐもった牛の鳴き声が聞こえて顔をそちらに向けると、少し先に見える街路灯の下をあの幌付トラックらしき車が走っていた。

私は混乱しながらも自分の車を探した。黒っぽい固まりが、もともと駐車したであろう場所になんとか確認できたので、なんだかおぼつかない足取りで近づいて手で触れた。すると塗装や錆さびがぼろぼろ剥はがれ落ちた。まるで不法投棄されて何十年も経ったスクラップ・カーのようだった。

吹き抜ける生暖かい風が草をそっと薙ないで無数のささやき声を生みだし、私のたるんだ頬を揺すり、頭皮を直しかになでた。

薄月夜の彼方の空では、きらめく無数の星々とともに、瞬またたかない金星と土星がならんで浮かび、人と比べ永遠とも思える寿命をほんのわずかすり減らしていた。

童謡 二編

土方のオケラ

土方のオケラは エイサカホウ

エイサカホウ

休まず穴ほり地中をすすむ

今日はチエンマイ

明日はハルピン

昨日いたのはどこだろか？

どこだろか？

土方のオケラは エイサカホウ

エイサカホウ

童謡

土方のオケラ

水のなかでもすいすいすむ

西のモロッコ

東のメキシコ

生まれたところはどこだろうか？

どこだろうか？

帰る故郷はありません

童謡

とびつくら

逃げたウサギが

庭の草食<sup>は</sup>んでる

口もとよくみりや

四つ葉のクローバー

幸せ欲しさに

ぴよんととびかかる

おどろいたうさぎは

ぴよんと遠ざかる

ぴよんと追えば

ぴよんと逃げる

ぴよん

ぴよん

ぴよっぴよっぴよん

ぴよん

とびっくら

びよん  
びよっぴよっぴよん

これ見たカエルが  
よろこんで跳ね回る  
とびっくらするなら  
おいらが主役だ  
負けん気強さに  
びよんと追いかける  
聞き捨てならぬと  
バツタも跳ねる  
びよんと跳べば  
びよんが増える  
びよん  
びよん



昔話

ねずみのアチ

むかしむかしある山に、お父さんネズミとおかあさんネズミ、そして十六匹の子ネズミが暮らしていました。けれど子ネズミはじきに末の子のアチだけになってしまいました。

なぜなら、酔っぱらったお父さんネズミは、ほうぼう雌ネズミの所へ行き、そのたびにお母さんネズミがひどく怒って「仕返しすべえ」と年上の子から順に蒸し焼きにして「これ食わねがったら別れんど」とお父さんネズミに迫り、お母さんネズミと別れたくなかったお父さんネズミは「うちにはまだほかに子がいるからだじよぶだんべえ」と自分に言い聞かせて泣く泣く食べる、ということがくり返されてきたからです。

ある日お母さんネズミは「可愛がってた子らが、親父のせいでみーんな死んでまった」と怒りました。お父さんネズミは「うるせーババだ。まだアチがいるでねえか。だどもおらもうどうにもできね。酒でも飲まなげりややってられね」とお酒を

## ねずみのアチ

ぐびぐび飲んでからアチに言いました。

「おまえまで食うのは忍びねえ、もう一人で生きてげ、子どもだで神様が守ってくれるにちげえね」

おかあさんネズミは「あゝほが、だーれも子がいなくなったらいったい誰におまえさんのことを当たればいんさ、困ってまうでねーか」と怒鳴って引き留めようと思いました。お父さんネズミはこれを無視してアチを巣穴から放り出しました。そこでアチはともかく小川に沿って山を下りました。

すこし行くと、老いたネズミがアチに声をかけてきました。

「あゝれ、アチ坊ひとりどこさ行くだ、あぶなかんべ」

この老いたネズミのことは、両親から「あの年寄り嘘ばっかこくけえ話するでねえぞ」と聞かされていたので、アチはだまっていました。

老いたネズミは、「おめえがいわなぐでもおめのおやじとお袋のことは昔っからよく知っとるでの。親は選べねっからの。しゃーなかんべ。これもって気いつけて行きや」と言って杖にしていた魚の小骨をくれました。



昔話

しばらくするとアチは、海辺にあるネズミの村に着きました。旅の間に青年になっていたアチは、みんなが意地悪なネコに悩まされているという話しをそこで聞いて、さっそく退治に出かけました。

やってきたアチを見た意地悪なネコは「ちようど腹が減ったとこだ。ひと飲みにしてやんべえ」と言いました。アチは「そつたらことやってみるがええさ！」と叫んで自分からネコの口に飛び込みました。

ネコはアチを丸呑みにすると、ひどくもがき苦しんですぐに伸びてしまいました。ネコのお腹の中で、アチは隠し持っていた魚の小骨を取りだし、そのとがった先っぽで胃袋を突き破ったのです。

こうして意地悪なネコをやっつけたアチは、海辺のネズミの村で大歓迎され、可愛いお嫁さんと新鮮な魚が拾えるエサ場をもらいました。やがて十五匹の子どもが生まれたので、アチは自分の兄姉けいしの名前を付けて大事に育てましたとき。

## ニセモノの子どもの詩 二篇

おみまい

このあいだの日曜日

おとうさんとおかあさんと

病院におばあちゃんのおみまいに行きました。

詩

おばあちゃんはふかふかのベットでねていて

ニコニコしてわたしのあたまをなでて

「おおきくなったね」

といっけてくれました。

前の週の日曜日におみまいに行ったときも

ニコニコしてわたしのあたまをなでて

「おおきくなったね」  
と喋ってくれました。

おばあちゃんは忘れっぽいまいたいだけど  
もしかして一週間でちよっぴり大きくなった  
わたしに気づいてくれたのかもしれない。

わたしは一つ大きくなった  
新しいクツをはいて  
おみまいに行ったからです。

おふろ

こないだおかんとおふろに入ったとき

ぼくはおかんのおっぱいがうかぶのをみて、

「アルキメデスの原理やなあ」

と言いました。

おかんは「あんたむずかしいことしっとななあ」

と感心してから

「なかになにがはいっとなるかいうてみい」

と言いました。

「わからん」

と答えると

「あんたへの愛情がつまっとるんやで」

と言いました。

「おとんの分はないんかい？」

と聞くと

「そりや、別のとこにちゃんど入っどるんや」

と言っておしりをたたきました。

「おしりの方がおっきいなあ、ぼくの方が少ないんかい」  
と聞くと

「あんたどっちが好きや」

とおかんは言いました。

「そらもちろん、おっぱいや」

とぼくは答えました。

するとおかんは

「あんたももうりっぱな男やな、

いっしょにおふろに入るのはこれきりにしような」

と言うて、次の日から

べつべつにおふろに入るようになりました。

なごりおしい思って詩にした。

## 遠い記憶　　（生命誕生神話）

これは、わたしがいまよりもずっと小さい頃、つまりまだわたしが受精すらしておらず、両親も生まれておらず、それどころか地球も水の惑星ではなく、二酸化炭素の大气に覆われた濃硫酸の海を持つ惑星だった頃の記憶である。

わたしはそのころ一片の有機化合物だった。

だから色恋沙汰や嘘や絶望、仕事やストレスや確定申告、政治や金や権力やうぬぼれや自己憐憫、怪我や病気や暴力、人生の意味や寿命といったものとは無縁だった。

世界はシンプルであった。

わたしはいつも通り、名湯・濃硫酸温泉となっている熱い海で、打ち寄せる波なみがしら頭に湧き起こる泡に溶け込み、ぶかぶかたゆたうていた。すると、天空をあまねく満たす二酸化炭素の分厚い雲を突き破って、まばゆい一条の光が差し込み、わ

たしやその周りでやはりぶかぶかやっていた泡泡あわあわを照らした。すると同時にこんな声が聞こえてきたのだった。

「おめほらのところはそろそろ生き物としてやってみる時期だべな。有機化合物やってるもんらはちよっくら押しくらまんじゅうでもしてくっついてくんろ、あとはおれの仕事だで任せてくれや」

この唐突で一方的な申し入れに、せんねんいちじつここ数百万年間、千年一日の生活を送っていたわたしや周りにいた有機化合物は死ぬほどおどろいた。そもそも声というものを聞くのも初めてだった。

しかも生き物になれというなんとも突飛なオファーで、それはどう考えても損な役回りだった。わたしたちはなんとかこの注文を回避しようと思いを絞った。そうして大急ぎで有機化合物組合を創立し、緊急合同協議を開き、あつという間に意見の一致を見て、すみやかに高らかな反対声明を上げたのだった。

「いやなこったい。だーれがお前の言うことなんか聞くもんか。俺たちはここでこーうやってのんびり波のゆりかごに揺られて口笛でも吹きながらあくせくしないでいるのがいいんだい！」

しかし光はわたしたちに冷たく言いはなった。

神話

「まあそう言うだろうてこたあはなから織りこみ済みさあな。いまみてえな時期が来れば月っちゅうもんの力を借りておめらを具合ちよんよくかき混ぜたら自然くつついちまって生き物になるよう初めっから工夫してあるんさ。つべこべいったつてなーんも変わんねえから観念しろや」

わたしたちは二度目の緊急合同協議を行い、今度は光の下手したてに出ることに決めた。「さきほどの無礼な口ぶり、なにとぞご寛恕かんじよくださいませ。ただ、わたくしどもといたしましたは現状に至極満足しごくしております。ですからこのうえ生き物になるというのはあまりにも身に余る光榮こうえい。何卒辞退なにとぞさせていただきとう存じます」

光は言った。

「なにもそんなかしこまって遠慮することあえねよ。身に余ろうが余るまいが最初からそう決まってるんだからさ、どうどうと胸張って引き受けりゃいいんだ」

「どうぞご勘弁を！」とわたしたちは言った。

「勘弁ならねえな」と光は言った。

わたしたちはすっかり取り乱した。

「こんちくしょう、こんだけいっても聞けねえっていうのか！

この、ろくでなし！



## 遠い記憶

すかぼんたん！

すつとどどっこい！

おっぺけペー！

お前のかあちゃんデーベースー！」

「まったく、おめらのお里が知れらあな」と光は言った。

この後<sup>のち</sup>もわたしたち心ある有機化合物は、一致団結して結合を拒んだものの、やがてむなしく力尽き、波のまにまにもみくちやにされるがままとなり、あっちがくつつきこっちがつながらり、伸びきったバネのようなアミノ酸の並びがいったん生じると、あとは自動的に爆発的な自己増殖が開始されてしまったのだった。

そこからの生命の歴史について詳細は省くが、以来およそ四十億年にわたって、おおむねろくでもないことがひっきりなしに起こってきた。めぐりめぐって幾<sup>いくせいそう</sup>星霜、その一環として生まれたわたしは、どんよりと曇ったある日の午後、一杯やって憂さを晴らすためバイオエタノールを作ろうと、七十五%の濃硫酸に木<sup>こ</sup>っ端<sup>ぼ</sup>を放り込み、ガラス棒でぐるぐるかき混ぜているとき、遙か遠い原初の記憶をふと思い出し、ガラス棒を持つ腕にいつそう力を込めたのだった。

## 終わりよければすべてよし

1

遠い世界のある国に、女神に祝福されたかのような美しさで諸国に知れ渡ったお姫様がいました。お年頃になったお姫様は、「お金持ちの国」の王子様に嫁ぐことになり、家来たちとお金持ちの国へ向かっていたところ、「強い国」の兵士たちに拉致されました。

メルヘン

強い国では、数日前に王様が突如身罷みまかっていました。王国の体面を保つために、新たに王となる王子に早急に王妃が必要となったため、名にし負う美しいお姫様を狙ったのでした。

この事件を知ったお金持ちの国の王子は大変苦しみました。お姫様を取り戻すには戦争をするしかありませんが、軍国主義の強い国と戦うことはとても危険だったからです。

しかし、王子の落ち込みようを見た、王子の側に仕える、巷の基準ならよほどの別嬪に属する女性たちが「いまこそ王妃の座を狙うチャンス」とばかり、あの手この手で慰め<sup>いたわ</sup>りましたので、王子はすぐに立ち直り「美しい姫は王妃として迎えられるのであるから、それなりの待遇を受けるはず。であるならば、戦に挑むことは、ただ私一人の幸福のために数多の民と多大な国費を用いるということ。さすれば、私の幸せは諦め、民の平安を守ろう」と結論づけたのでした。

強い国に連れてこられた美しいお姫様は、さっそく強い国の若い王様と結婚させられました。お姫様は、これからどれほどひどい日々を送るのかしらと恐れていましたが、実際は下にも置かない扱いを受けました。

強い国では前の王様が急に亡くなってから、実質的に国を治めていたのは若い王様ではなく、その母である元王妃でした。元王妃はそもそも強い国に滅ぼされた国のお姫様だったので、夫である前の王のことを激しく憎んでいました。

そんなこともちろん夫の王の前ではおくびにも出しませんでしたが、代わりに子どもを冷たくあしらってきました。このため若い王様は、母親のことをひどく恐れ、おびえて育ちました。夫である王が死ぬと、元王妃は気の弱い若い王を操って自由

と権力を手にしたのでした。

またいっぽうで元王妃は、無理に連れてこられた美しいお姫様に若い頃の自らを重ね、同情していたのです。

2

お妃となった美しいお姫様は、はじめこそすべてを警戒していました。けれどそのうち夫である若い王様が自分の願いをなんでも聞いてくれることに気付きました。若い王様は、自分の母親という後ろ盾を持つお妃の機嫌を損ねることを恐れていたのです。美しいお妃は『ここでの生活も悪くないわね、旦那も私のいいなりみたいだし。考えようによったら、こちらに嫁げてラッキーだったのかも知れないわ。お金持ちの国の王族はみな締め入り屋だっというし』と思うようになりました。

自分の願いがどこまで聞き入れられるのか試すため、美しいお妃は真夏に「雪が欲しいわ」と言ってみました。すると三日後には巨大なかき氷機でお城の庭一面に雪が降らされたので、お妃は大変お気に召しました。

その年の冬、お妃が「旬のスイカを一口食べたいわ」と言うと、四日後に地球の裏側から運ばれてきました。スイカを見たお妃は、家来に不機嫌そうに言いました。「遅すぎるわ、もうそんな気分じゃなくてよ。でも今回はスプーンに半分だけ食べてさしあげる。人の上に立つ身ですもの、辛抱強くなくてはなりませんから。でも次はもっと早く、わたくしの気分が変わらぬうちにお持ちなさい！」

わがままもこの頃にはしっかりと板に付いていたわけです。

ちょうど同じころ、お金持ちの国の王子様は、新たに、太陽が照れるほど美しいお姫様を見つけて結婚することが決まりました。王子様は「国民のことを第一に考えた私への、天からの贈り物に違いない！」と大喜びです。

3

お金持ちの国の王子様が結婚するという知らせを聞いた美しいお妃は、激しい憤りを露わにしました。

「わたくしがさらわれたというのになにもしなかった者の幸福を神が許すはずはな

い！　いいえ、神が許してもこのわたくしは許しませんわ！」

美しいお妃は、自分の心変わりのことはすっかり棚に上げて、お金持ちの国の王子様のことを一方的に憎みました。わがまま贅沢もし尽くして、ほかになにを考える必要もない生活を送っていましたし、十六歳の反抗期という要素がこれに拍車をかけたため、憎しみは際限なく膨らみました。

ある日とうとう、お妃は臥所ふしどで休んでいた元王妃に、お金持ちの国への宣戦布告を願いました。

元王妃は、国を治められるだけの少なからぬ分別を備えていたものの、重い更年期障害のために寝込み、何をするのも考えるのも憂鬱ゆううつで億劫おっくうで、ほとんどあらゆることへの感心を失っていたので、「えっ　なんですって？　よく聞こえなかったけれども…」と返したあとに、もう習慣となった言葉を付け足してしまいました。

「あなたの思い通りにしていいのよ、美しいお妃様」

これを聞いたお妃は喜び勇んで軍隊を招集しました。

はや一月後には、歩兵十万、騎兵六万五千、馬引きの戦車千四百台を含む総勢十七万がお金持ちの国への行軍を開始。

これに気付いたお金持ちの国は、国家存亡の危機とばかりに、金に糸目をつけず、同盟国と共同戦線を組み、どうにかほほ拮抗きっこうする軍勢を集めて戦闘に臨みました。

4

この世界の戦争は、私たちの世界のそれとはずいぶん違う方法で行われました。広大な原野に格子のマスを描き、将軍はお互い自軍の人馬をコマとして順番に一手ずつ進めて、まるでチェスのようなコマ取り合戦を壮大なスケールで繰り広げるのです。そのうえ、いったん開始された戦争は、どちらかの将軍が詰みになるまで決して終わりません。血は流れませんが、ものすごく時間が掛かります。

一度に動くのはどちらかの軍の手駒一つだけです。兵士たちは戦場で暇を持ってあまりました。そこで、自分の立ち位置に目印を置くと、呼ばれたときだけ配置に戻って動き、あとは原野の開拓を行いました。マスを測量の基盤として、立派な都市が築かれると、野戦はいつからか市街戦になりました。男たちはしだいに別の仕事や家庭を持ち、その片手間に兵士を続けたのでした。

戦争のあいだに、お金持ちの国の王子は王様となり、太陽が照れるほど美しいお妃とじゃんじゃん子どもをつくり、利殖りしょくに励み、楽しく暮らしました。強い国の美しいお妃も、反抗期を過ぎるとお金持ちの国の王子のことなどどうでもよくなり、自分を大事にしてくれる、強い国の気の弱い王様と幸せに暮らしました。

戦争が始まって三十七年後、両軍の將軍は、たまたま同じ日、同じ時刻に老衰で息を引き取りました。なんと末期まっこの言葉も一緒に「戦地での大往生、これこそ武人の誉れ。同胞たちよ、あとのことは頼んだぞ」というものでした。このとき残っていた兵士の数は両陣營ともかっきり同じで五千九百六十三。

両軍は將軍を弔とむらうため、一時停戦協定を結びました。その後、わざわざ戦争再開を申し出る者もなかったのです。じきに戦争のことは過去の出来事となりました。

そして、もともとなにもなかった戦地は屈強な男たちが活躍する活気ある街となつて、未永く発展したのでした。



闇鍋（みやなべ）　－ノンジャンル小品集－

<http://p.booklog.jp/book/54429>

著者：深山徹生（みやまてつお）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tetsuo-m/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54429>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54429>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ